



木村 真一 大阪大学大学院生命機能研究科生命機能専攻 教授
(前 極端紫外光研究施設 准教授)

思えば遠くに……

きむら・しんいち / 1988年東北大学理学部卒業、1991年東北大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。日本学術振興会特別研究員、神戸大助手、分子研助手、神戸大助教授を経て2002年4月より分子科学研究所助教授（准教授）、2013年7月より現職。

地方の田舎の高校を出てから深く考えずに地方の大学に入学し、そのまま大学院に進学したKは、指導教官に連れられて、できて間もないUVSORにやってきた。そのころ所属していた研究室は大変貧乏で、最先端の実験装置がなかったため、自前の装置がいない放射光ビームラインを利用した実験がKの研究課題であった。Kは、大学院在籍中に指導教官が異動し、何故か理論系の教授のもとで学位を目指した。(よって、実験は元の指導教官からも半分独立して勝手に行き、また教授からは理論を叩きこまれた)。

在学中にはいろいろなことがあったが、無事に学位がとれた。その後数年が経ち、ポスドクの任期も終了する頃、UVSOR助手の公募が出た。独立助手のポジションらしい。上から指示されることが苦手のKは、自分のために用意してもらったポジションと勝手に思い込んだ。しかし採用になるとしても半年後なので、それまでの間、元の指導教官のいる関西の某大学に10ヶ月任期で出て行く助手となった。10ヶ月の助手となると雑用は回ってこない。それ幸いにと大学にはほとんど行かず各地の放射光施設などを使いに出歩いてい

た。運がいいことに無事にUVSOR助手に採用され、5ヶ月間で関西の某大学をあとにした。

UVSORでは、独立助手ということで、当時の所長から特別研究費をいただき、また、放射線主任者に配分されていた研究費もあったため、新しい装置を立ち上げ、独自の研究を行うことができた。そうこうしているうちに、「某大型放射光にビームラインを立ち上げるので帰って来い」という誘いがあり、4年半で関西の某大学に戻るようになった。

某大型放射光でのビームライン建設は困難を極めるものであった。世界一大きな放射光加速器に極めて低いエ

ネルギーの赤外ビームラインを作るといのは、当時としては無謀と思われていた。実際、普通の集光鏡だと実験室で使う光源よりも暗い光になってしまふことが予想された。そこで三次元マジックミラーという特殊な集光鏡を開発することにした。世界初の試みで、うまく行かなければビームライン建設計画も年単位で遅れ、多大な迷惑がかかるため、失敗が許されないものであった。しかしながら、幸いにも計算通りに事が進み、無事にビームラインが立ち上がり、実験が行えるようになった。

成果が出始めた頃、「UVSORの高輝度化が決まりそうだから帰って来い」



現在大阪大学にいる分子研OBの会。櫻井先生(右から3人目)の歓迎会も兼ねて。右から4番目が著者。

という天の声が聞こえた。その頃、自分の今後推進すべき研究は低エネルギー放射光分光と考えていたKは、高輝度化されたUVSORでは、自分のやりたいことができるのではないかと考え、応募することにした。助教授のままの横滑りなので、周りからの相当な反発があったことはいまでもない。

運良くUVSORで2度目の採用となり、高輝度化の予算も決まり、世界トップを目指した光源とビームラインへのスクラップ&ビルドが始まった。UVSORスタッフ全員のチームワークのよさにより、順調に高輝度化の作業が進んだ。光源加速器はその後に2度の改造があり、小型放射光源としては世界最高輝度になった。それに合わせて、ビームラインも更新され、世界トップレベルの性能を出すに

至っている。Kが主に関わったビームライン・実験装置は、BL5U光電子エンドステーション(02~03年)、BL6B赤外ビームライン(03~04年)、BL7U光電子ビームライン(05~07年)、BL3B真空紫外直入射ビームライン(09~11年)、BL1Uテラヘルツビームライン(11~12年)、BL5Uスピン分解光電子ビームライン(12~13年)であった。つまり、在職期間中、ずっとビームライン建設にかかわっていたことになる。この他に、光源グループと新しい放射光であるコヒーレント放射の開発も行い、また国内外のグループとの共同研究で多くの成果が生まれた。多くの卒業生も送り出すことができ、博士学生・ポスドクの大半が大学教員になった。

現在、Kは関西の別の大学で研究室

を主宰している。後進の育成が必要であると考えたためである。生命系の研究科に所属しているが、これまで物理しかやってこなかったKを採用するとは、この研究科は思い切った事をするものである。分野融合を謳っているため、基礎物理から生命を研究せよということのようだが、前例もないために、Kとしては新たな困難の出現である。しかし、Kはこれまでいくつかの難題を突破してきた経験から、この困難も何とか乗り越えようと、もがいているところである。

ユーザーからスタートして現在までの26年間、大変お世話になりました。これからもUVSORのユーザーとしてお世話になりますので、よろしくお願いいたします。

櫻井 英博

大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻 教授
(前 協奏分子システム研究センター 准教授)

分子研を去るにあたり

さくらい ひでひろ / 1989年東京大学理学部卒、1994年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了(博士(理学))、東京大学助手、日本学術振興会海外特別研究員、大阪大学講師、同助教授を経て、2004年4月より分子科学研究所助教授(准教授)、2014年4月より現職。平成25年度日本化学会学術賞受賞(写真)。



分子研で、専任として10年、前後の兼任を含めると11年もお世話になったとは思えないぐらい、あっという間の日々でした。面接を受けたのが、今、メインで研究している仕事の最初の論文を発表する前でした。いわば全く実績のない分野のプレゼンであったのににもかかわらず、採択していただいたその当時の茅所長と人事選考委員会の方々に対し、今年、その内容で日本化学会学術賞を受賞できたことで良い恩返しができたと同時に、一応、研究面

でも分子研に多少は貢献できたのではないかと、少しほっとしています。

特に統計を取っている訳ではありませんが、恐らく私が分子研でナンバーワンだったことがひとつだけあります。それは「分子研パンフレット(特に英語版)を配った数」です。私の海外出張のバッグは、常に往きの方が圧倒的に重く、その大半をパンフレットが占めていました。お陰でコンパクトな荷物での出張にも慣れましたし、帰りはスカスカのバッグでの帰国で楽をし

した。

「分子研の准教授ぐらいハッピーなポストはない」と良く言われ、実際に私もエンジョイした一人であることは間違いありません。ただ、特に合成系の人間にとっては、そのまま受け身では分子研の環境は必ずしも理想郷ではありません。合成系での知名度/プレゼンスの低さ、それゆえに伴う学生獲得の困難さ、これらを自分なりに解決してこそ、快適な研究環境を構築することができます。どうせ同じ分の汗を

かくのであれば、個人ベースよりもむしろ、総研大としてコンスタントに学生を獲得できるシステムを構築する方がいいと思って、その方向で努力して

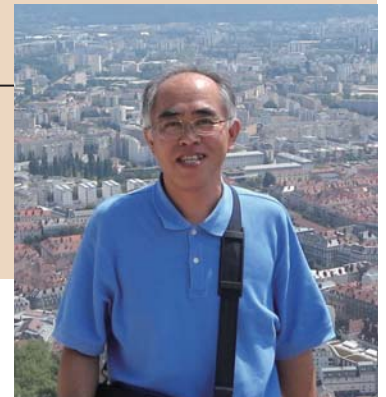
きました。この件に関して、自由に私の裁量に任せていただいた中村、大峯両所長に大変感謝しています。こうやって分子研時代に得た人脈は、赴任時に

期待していた以上に広がり、研究以上に大きな財産になったように思います。

藤井 浩 奈良女子大学大学院自然科学系化学領域 教授
(前 岡崎統合バイオサイエンスセンター 准教授)

ありがとうございました

ふじい・ひろし / 1985年金沢大学工学部卒、1990年京都大学工学研究科博士課程修了、北海道大学理学部化学科助手、ミネソタ大学化学科博士研究員、山形県テクノポリス財団生物ラジカル研究所主任研究員を経て1998年より分子科学研究所助教授、2001年からは岡崎統合バイオサイエンスセンターに移動、2014年より現職。



私が分子研の着任したのは1998年3月であり、それから約16年間過ごさせていただきまし。たいへん長い間お世話になり、ありがとうございました。

私が最初所属したのは、分子物質開発研究センターという新しく発足したセンターでした。着任した当初は、現在あちらこちらで活躍されている諸先輩方が助教授としておられ、研究はもちろんのこと教授会議などでもいろいろ活発に発言されるのを見て、すごいところだなと感じていました。着任して3年後、山手地区の新キャンパス構想の絡みで基生研、生理研と共同で発足した統合バイオサイエンスセンターに所属が移り、それ以降、今回の転出までお世話になりました。統合バイオサイエンスセンターでは、多くの基生研、生理研の先生と交流することができて、また各研究所の文化の違いも実感でき楽しかったです。

分子研は、研究環境はもちろんですが、明大寺の自然環境はたいへんすばらしいものでした。たぬぎ、ハクピシン、アオダイショウなどいろいろな動物がいました。私が使っていた研究棟

203号室からは、中庭の桜と銀杏の木がよく見えて、季節感を味わうことができました。また、ここで初めてキツツキ（アカゲラとコゲラ）を見ました。アカゲラは、夕方になると葉っぱの落ちた銀杏の木によく飛んできて、コゲラは桜の木をよく突っついていました。一度、いなくなった後に木を見に行くと、ゴルフボールくらいの穴が開いて感動しました。さらに、なんと玉虫も見ました。実験棟の北側の通路を歩いているとき、きれいな虫が飛んでいるのに気づき、よく見ると玉虫でした。きれいな緑色の羽が太陽の光で輝いていて、子供のころに一度だけ近くの神社で捕まえたことが思い出されました。皆さんもいろいろ見つけてみてください。途中で移った山手は、研究室の窓から見えるのは隣の棟の建物だけで、とっても残念でした。山手の南側にたくさん植えてあるハナミズキに期待しています。豊かな環境を得るには、長い時間がかかるようです。

研究は本当に自由に行いました。これは、准教授と教授が独立した関係で、内部昇進を禁止しているためにできる

ことで、大学では味わうことができない分子研准教授の特権だと思います。また、人（助教さんと秘書さん）と研究費のサポートもたいへん重要だと思います。現在在籍されている、あるいはこれから分子研に来られる准教授のみなさんも、ぜひこの自由な研究環境を大いに満喫していただきたいと思います。また、分子研准教授のこのような自由な研究環境が今後も維持されることを願っています。

4月に現職に着任して、毎日、授業、学生の指導、大学の会議などに追われて忙しくしています。大勢の学生に対する授業や学部学生の研究指導は、研究所経歴の長い私には新鮮で、楽しく過ごしています。これからは、外部のユーザーとして分子研とつながっていただけたらと思っています。

最後になりましたが、長い間サポートいただきました歴代の所長先生、いろいろな所で助けていただきました技術課、事務局の方々、そしてなにより一緒に研究を支えてくれた助教さん、秘書さん、ポストドク、学生の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。